

スペイン語圏を知る本(その19)

江本繪門著

『スペインひとり暮らし  
アンダルシアの12ヵ月』

(中日新聞社、2001年刊)

評者 坂東 省次

スペインについて書きたい本は数多くあるが、その一冊は「スペインの12ヵ月」と決めている。そこにスペインの実像が見えてくるかもしれないという一種の願望があるからだ。そんなことを思っている間に、「アンダルシアの12ヵ月」が先に出てしまった。南部アンダルシアは、スペインのなかでももっともスペイン的な地方として日本でもよく知られているところだ。そのアンダルシアに、著者はいったい何を感じながら12ヵ月をすごしたのであろうか。

著者の江本氏は、テレビ局(中部日本放送)に「37年と8ヵ月」という時間を勤めたあと、1996年に退職され、その後は画家としての第二の人生を歩んでおられる方である。先日お送りいただいた『江本繪門個展 - 「アンダルシアの12ヵ月」出版記念展』の案内文を、ここに紹介しよう。

「昨年再度スペインを拠点にして欧州を3ヵ月に渡りスケッチ旅行した江本先生が『アンダルシアの12ヵ月』を発売されました。今回は挿絵も併せ、スペインを中心にヨーロッパの風景画50余点を展示致します。さわやかな風のようなタッチで描かれた油彩、水彩、パステル画をお楽しみ下さい。」  
(名古屋・丸善)

文面から、第二の人生が順風満帆であることが推測できよう。定年後に画家として第二の人生をスタートすべく、著者は一つの決意をした。豊かな日本を一度離れ、一年間、自分を見つめるために、言葉のわからぬ外国でひとり暮らしをすることであった。それは大いなる試練であった。

江本氏が選んだ外国とは、ほかならぬスペインである。現代絵画の巨匠パブロ・ピカソの生誕の地として知られる南部の都市マラガに近いベナルマデナという小さな町の賃貸ビソ(マンション)で、1998年1月から12月までの一年間を暮らした。

本書はその一年間にわたるスペイン滞在日記といってもよい。著者の撮った写真やスケッチを楽しみながら、スペインの各地を著者とともに旅行している気分になるじつに楽しい本である。

副題こそ「アンダルシアの12ヵ月」とあるが、アンダルシアはあくまで生活の拠点であり、そこを中心に、著者は絵材を求めてトレド、アビラ、バレンシア、バスク、カタルーニャなどスペイン各地を旅行し、さらに隣国のポルトガル、フランス、アフリカのモロッコまでも足をのびしている。

スペイン滞在をはじめて間もなく、長期滞在許可を申請すべく書類の作成で体重が減るほどに苦悶の日々を送ったり、8月には突然の腰痛でひとり阿鼻叫喚の地獄絵図を体験したりと、大変な事態に何度か遭遇するが、いずれも自らに課した試練として受け止め、見事に難問を解決した著者は、9月のある日、ベナルマデナの生活に心から満足して、こう語っている。

「この1月からここに住んでみて、こんなにも天災の少ない、温暖な土地があるのかと、あらためて感心する。

冬もさほど冷えこむこともなく、さりとして夏は思いのほか涼しく快適で、梅雨もなく、もちろん台風もやってこない。乾燥した蒼い空と太陽に恵まれ、地中海は穏やかに青い水を湛える。地震もないらしい。

のんびりした時間がゆったりと流れ、その上、物価はおしなべて安いときは、ペンション(年金生活者)が住むには、ここは最適であると思う。」

江本氏の選択は間違っていない。数あるヨーロッパの国々の中でもスペインを選び、その中でももっとも気候に恵まれた南部アンダルシアの町を選んだことで、人生最高に幸せな時間に浸ることができたのである。12月、スペインを離れる前には、こんな言葉も残している。

「フォーシーズン、12ヵ月・・・アンダルシアの風を感じながら、60を超えた自分が今なお、青春の真っ只中にいることを実感する幸せこそが、ここで過ごした意味だったのかもしれない。」

ばんどう しょうじ(教授・スペイン語学)